

## 募金活動の今と昔

浅田 毅衛

読者の皆さまも周知のように、今大学では創立一二〇周年記念事業募金活動を続けています。この活動は『明治大学ルネッサンス21』を合言葉に、大学の二一世紀に向けての態勢を整えるための事業募金活動であり、一九九六（平成八）年から六年を期間として、一〇〇億円を目標に進められているものです。その現況について、募金委員長栗田総長は九月二五日発行の『募金ニュース』

五〇号のなかでつぎのように報告しています。「四年あまりにわたって進めてきた創立一二〇周年記念事業募金活動も、いよいよ終盤を迎え、六年間を予定している募金活動期間もあますところ一年半ほどになりました。お蔭様で申込金額は八〇億円を越し、一〇〇億円の目標達成までもう一步の処まで参りましたが、これまでの全期間を通じて「なべ底」状態にあった日本経済の低迷の影響は未だに深刻で、これからもかなりの困難が予想されます。一層のご協力をお願いしなくてはなりません。――以下略――と、私も募金常任委員の一人として、日本経済が低迷しているなかで良く集まったものだと満足すると同時に、委員長はじめとした募金委員の皆さまや担当職場の方たちの努力に感謝と敬意を表しておきたいと思えます。

この募金活動の終盤を迎えて、その活動の教訓を導き出すためにも明治大学の資金調達・募金活動の歴史を私はみていくことにしました。

明治大学の募金活動の歴史は古く、一二〇年前の創立期さかのぼに遡ります。その篤志家の第一号は創立者の三人で学

校の運営費を捻出するために、廃藩置県で士族に授与された公債証書や先祖伝来の遺産を売り、そのうえ無報酬で教壇に立つ行為は事業募金といえるでしょう。このことを知った在校生（斉藤孝治氏外二〇〇名）より、一八八二（明治一五）年の四月九日、無報酬で教鞭をとっていた両園寺公望、フランス人講師ジョルジュ・アッパールの両氏を加え、岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操の五氏に感謝状と磁器の記念品を贈った美談が歴史に残されています（明治大学六十年史、六頁）。

創立期の大学運営は創立者三人でおこなったが、学生の納める校費（月謝通学生三〇銭・入塾生五〇銭）以外になく、校舎（島原藩邸）の賃貸料の支払いにも不足するほどの赤字経営で、創立者は学校運営費捻出に苦慮していたのです。

岸本は、旧鳥取藩池田輝知氏に援助を請い、創立から四年間月々二〇円の寄付を得て、学校経営の一助にしていきました（「明治大学百年史」一六五頁）。まさに、池田侯爵は明治大学への「募金寄付者第一号」といえるでしょう。

一八八二年一月には、矢代が宮城、杉村虎一を連帯保証人にして縁戚の銀行取締役長直四郎氏から、三〇〇円を借用して学校運営費に充当しています。この三〇〇円は校舎家賃の一〇ヶ月分に相当し、借入金の返済条件は利子として毎月七円五〇銭を一年間支払い、元金三〇〇円は均等割で毎月二五円宛支払い、一二ヶ月目に完済とされています。

創設二年後の一八八三（明治一六）年になって生徒数が五八〇人となり、有楽町校舎に収容できず、岸本は神田区駿河台南甲賀町一番に新校舎建築を計画しました。しかし、三〇〇〇円の建築資金調達ができず親近者に援助を頼みました。この岸本の資金調達の話の子息忠雄氏は「父のことも」（明治大学の発祥）所収）のなかで、つぎのように書き残しています。

長文のため、その要旨と原文の一部を紹介します。三〇〇〇円の建設資金が集まらず、勝気な父も弱りこんで母しま子に落胆話をしたらしく、母は当時帝大の会計をしていた従兄の竹村頼堅氏を伴って埼玉の藤波家（実家）に祖父を訪ねた。「母の父がまた分かった人で『お前

を岸本みたいな貧乏書生のもとにやったのは岸本の前途を見こんだからだ。その男が生涯の為事とする学校のことを金で傾倒させるのは何としても気の毒だよし貸さう」と金利もいらぬ、何年でも使へといつて、その頃はまだ銀行の信用が薄く、みんな手元に現金を持っていたから、即座に三千円の耳を揃へてくれた。この金で明治法律学校の建築を完成することができたのである。」(原史料『駿台新報』第一八六号)。

この話が昨年一月一七日の創立記念日に日本テレビ「おもいっきりテレビ」番組『今日は何の日』で放映され、話題を呼びました。私の顔が少し映ったことから、この話の問い合わせが色いろとありました。この三〇〇〇円という貨幣価値は一八八三(明治一六)年の明治法律学校の年間収入三四二一円に近い額であり、当時授業料月謝六〇銭で年間七円二〇銭現在平均約七〇万円であることから、その額が高額であることが類推されます。

募金活動、資金の調達活動は創立期から大学の節目、節目におこなわれています。その活動の歴史的教訓は法人事務・教職員、校友学生が、それぞれの領域で明大を

愛する心で行動し、それが募金達成の成果であることを教えています。

一二〇周年記念事業募金も目標達成まであと一歩、学生に替わった父母会の支援活動を加え、明大人が一丸となって残された一年半「母校愛」に燃えた募金行動を願っています。